

幼児の描画行為の〈始まり〉をどう捉えるか

—保育者が創造的な関わりを構想するための手がかりとして—

彦坂 敏昭

はじめに

本稿は、保育者養成校（京都造形芸術大学こども芸術学科）に所属する教員であり、幼児期に限らない描画行為と、描画行為を巡るコミュニケーションの関係について、実践的考察を続けてきた筆者が、幼児期にみられる「なぐり描き」や「スクリブル」と、それらを巡る保育者としての関わりの方を、筆者ならではの視点で捉えなおそうとする研究ノートである。

幼児の描画行為が複雑な相互作用によって展開していく過程は、多くの研究者の業績の中に確認することができる。中でも片岡杏子による著書『子供は描きながら世界をつくる エピソードで読む描画のはじまり』は、描画行為の周りに発生するコミュニケーションに主眼を置いた本研究に先行する重要な事例研究である。筆者は、それらの研究にみられる前提を踏襲し、幼児の描画行為が他の探索行為と同様にさまざまな発達の意味が内包された行為であることを前提とし、且つ、描画行為の〈始まり〉を絶対的な解釈によって固定化することではなく、その都度解釈を更新し、再設定を繰り返すことで、描画行為への創造的な関わりの方を示したいと考えている。

一、研究の背景

(一) 〈始まり〉と〈終わり〉の不明瞭さ

これまでにもさまざまな視点からの研究がおこなわれ、学問分野としても発展してきた児童画研究ではあるが、それらを概観した際に、筆者には、それぞれの研究が対象としている発達過程の〈始まり〉と〈終わり〉に対する不明瞭さが疑問として残った。それは、描画行為を他の探索行為と併置しない極端な特別視への懐疑でもある。

本研究では、その〈始まり〉と〈終わり〉を、近接するその他の探索行為との関係の中へ再配置する作業を通して、その発達の意味を捉え直したいと考え

ている。

(二) 〈始まり〉の拡張

本稿におけるその〈始まり〉へのまなざしは、筆者が考える描画行為が持つ長期的な視点での人格形成や発達の可能性と密接に結びついている。それは、描画行為に他者理解のプロセスを見い出そうとする筆者独自の視点である。描画行為が、頭の中に存在するイメージの単なる再現ではなく、それら頭の中にあるイメージからの逸脱やズレを経験するコミュニケーションの側面を多く含んでいると筆者は考えている。

また、その〈始まり〉については、ローウエンフェルドが発達段階表で示したように、二歳から四歳頃の「なぐりがき期」を設定することが一般的ではあるが、ここでは、その対象を母親の体から世界に投げ出されて間もない〇歳から四歳頃までに拡張したい。描画行為に関わる発達が、その他の発達とどのように接続可能かを、本研究の中で十分に考慮することがその目的である。

(三) 〈終わり〉とその展望

では描画行為の〈終わり〉を私たちはどのように捉えるべきだろうか。ここにはふたつの出口がある。樂觀的な視点と、批評的な視点であり、筆者はこの批評的な視点に望みを託したいと考えている。〇歳から四歳の期間に種から芽を出したそれらの発達過程は、六歳前後から高等学校を卒業する一八歳ごろまでの間に花を咲かせることなく萎んでいってしまうことが少なくない。このような多くの人が描画行為と疎遠になっていく現象について、保育者はどのような責任を感じる必要があるのだろうか。〈終わり〉の設定を試み、問いを立てることで、新しい保育や幼児教育の姿を描いてみたい。

つまり、本研究の意義は、描画行為の〈始まり〉を設定し直す中で、その朽ちていく発達過程をその後の荒波を乗り越えることができる分厚い経験として形成する可能性を探り、そして、〈終わり〉を批評的に直視することで、保育実践にとっての建設的な視座を獲得しようとするものだと言える。

二、〈始まり〉をどのように考えるか

この章では、他の研究者の視点を援用しながら、筆者が描画行為の〈始まり〉

をどのように捉えようとしているのかについて明らかにしていきたい。

(一) ケロックの眼差しを通して

二歳に満たない幼児の描画行為(スケッチ)は児童画研究の中であまり重要視されてこなかった歴史を持っている。この分野に光をあて、推し進めたのがローダ・ケロック(二九四八—一九八二)である。彼女はおよそ一〇〇万点の児童画から、それらを分析するための基本的様式の抽出・分類をおこなった人物である。例えば、著書『児童画の発達過程—なぐり描きからピクチャへ』の中では次のように語っている。「基本的スケッチとは二歳あるいはそれ以下の幼児の作る二〇種類の形のことである。これらの動作は各種の筋肉緊張の様式を示すもので、視覚的ガイダンスが必要なわけではない。二歳児は眼によるコントロールなしにすべてのスケッチを作れる。」⁽¹⁾とし、スケッチは、幼児にもともと備わっている筋肉緊張の延長として始まるとしている。そして、その筋肉緊張の動作は、「運動快感」や「視覚的興味」によって反復されることについても同著の中で触れている。発達過程の〈始まり〉が、素朴な意味での彼らのなぐり描きが始まる時点よりもっと遡った時点に存在する可能性を、ここから読み取ることができる。

(二) ローウェンフェルドの眼差しを通して

美術教育についての研究者であるヴィクター・ローウェンフェルド(一九〇三—一九六〇)は、著書『美術による人間形成』の中で「なぐり描きの意味を理解するためには、早期幼児期の運動感覚的経験の重要性を知る必要がある。」⁽²⁾とし、なぐり描きが運動感覚的経験と紐づいていることをケロックよりも早い時期に指摘している。さらに教育者としての関わりについては、「どんな子供も、そのなぐり描きを、決して邪魔されるべきではない。」⁽³⁾、「なぐり描きの最初の段階においては、活動を進行させるために、教師が与える励まし以外の刺激は必要ない。既に述べたように、なぐり描きは鑑賞されるべきではない。」⁽⁴⁾とはつきりとその美術教育研究者としての視点を述べている。

筆者もローウェンフェルドと同様に描画行為が早期幼児期の運動感覚的経験と紐づいて論じられることの重要性を感じてはいるが、教育的関わりの視点となると、彼のその姿勢に賛同することができない。それは、彼の消極的な静観

姿勢が、対象となる発達過程の〈始まり〉を曖昧に設定していることに起因していると感じるからである。

筆者はその研究対象である描画行為の〈始まり〉が意識的に設定されていないければ、保育者としてのやるべきことも見えてこないだろうという考えに立脚している。筆者が想定する〈始まり〉の見取り図では、幼児がなぐり描きを経験する以前から保持してきた複数の運動感覚的経験が、なぐり描きの運動感覚的経験に先行する形でさまざまに遍在しており、その異なるふたつ(もしくは複数の)運動感覚的経験を接続する方法を創造していくことが、保育者(もしくは、児童画を研究するもの)に課せられた使命だと考えている。

(三) グレッシングの眼差しを通して

さて、その接続の方法を考えるにあたり、参考にした取り組みがある。ヴォルフガング・グレッシング(一九〇二—一九六五)が提唱した「両手描き」である。

彼は著書『なぐり描きの発達過程』の中で、「なぐり描きはひとたび紙上に現れると子どもの遊戯活動の世界に属し、その世界の法則に従います。子どもは彼の手でつくられたものがどうしてそれらの形態になったのか、いっさい知りませんし、おとなはなおそのことです。」⁽⁵⁾とし、なぐり描きが没入的行為の痕跡としてあることを論じている。さらには、「子どもはなぐり描きをする間、ジグザグの線をつくりながら、紙の上を、蠅が壁の上を歩くように歩くのです。」⁽⁶⁾とし、描画行為と歩く行為の類似性を指摘している。

同著書の中で「子どもは自分をまだまったく両側的な、〈ピラテール〉な生きものだと感じています。」⁽⁷⁾とし、「学校の影響—文字を書くことを学ぶこと—によってたいそう不幸なはたらきを左手に与えている」⁽⁸⁾ことなどの理由をあげ、右手が優先化する過程で子どもの感情が萎縮し、形態感覚を平面的なものにしてしまうことを危惧し、その解決策として幼児期における描画行為を両手でおこなうことを提案している。

まさに、描画行為の〈始まり〉を幼児の両手を使った触覚的な経験まで遡り、なぐり描きを持つ運動感覚的経験との接続を試みた創造的なアイデアである。(しかしまた、ここでも疑問は残る。道具を持つことによって失ってしまう感覚の可能性はどのように考慮されているのだろうか。)

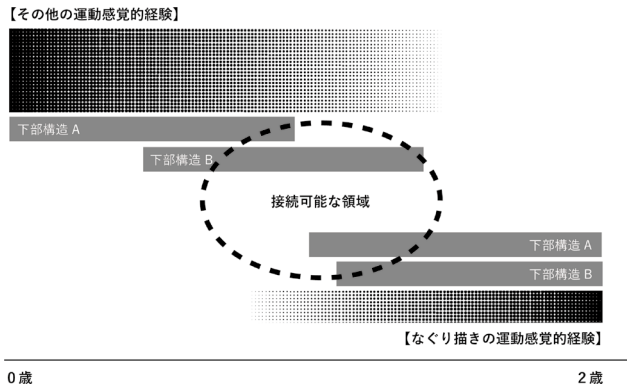


図1

(四) 見えてきた〈始まり〉の見取り図

さて、三者三様の考えに触れながら、筆者が描画行為の〈始まり〉をどのように捉えようとしているのを明らかにしてきた。また、その視点が、保育者としての幼児の描画行為への創造的な関わりを構想するために、きわめて重要な視点であることも共有できたのではないだろうか。ここまで明らかにしてきた〈始まり〉への視点を「図1」にまとめてみた。

全ての運動感覚的経験には複数の下部構造が存在する。それぞれの運動感覚的行為が幼児のどのような発達過程の中に存在しており、その行為の反復が何に動機付けられているのかを丁寧に確認することで、下部構造の種類や数は変化していくだろう。またそれぞれの運動感覚的経験でその下部構造のレイアウトも多様である。例えば、【なくり描きの運動感覚的経験】の下部構造については、ケロツグの言葉を借りれば、「運動快感」や「視覚的興味」がそれにあたるだろう。そして、スクリブルが視覚的ガイダンスを必要としない運動感覚的経験であることを考えれば、「運動快感」が「視覚的興味」に先行する下部構造

であることが想像できる。また、【その他の運動感覚的経験】については、それはグレイティングルがその著書の中で言及した両手を使用した触覚的行為に該当する経験が当てはまるだろう。もちろん【その他の運動感覚的経験】はそれだけではなく、その他にもさまざまな感覚的行為を幼児はなくり描きに先行する形で所持しているはずであり、それらを丁寧に掘り起こすことのできる観察力も大切である。そしてそのふたつ（もしくは複数の）下部構造を接続させ、描画行為であればスクリブルの導入部分の環境をその後の下部構造の発達も意識しながら構想していくことが保育者に求められる課題だと言えよう。もちろん、幼児が主体的にいきいきとその取り組みをおこなうことができる環境づくりを前提としつつ、共同注視の視点を持った柔軟な関わりを構想することは最低条件である。

三、保育の構想と経験の奥行きの関係

(一) ねらいを設定する

先の「図1」を有用なものとするためには、【なくり描きの運動感覚的経験】の奥行きに親しんでおく必要がある。パズルのピースを組み合わせる場合、片手に持つピースの特徴をしっかりと把握し、もう片方の手には、できるかぎり多くのピースを選択肢としてあげることができれば、自由にそれらを付け替える中でさまざまな組み合わせを発見することができる。具体的な保育を構想していく際にも、両手に持つピースの豊かさが、その場の環境、幼児の特徴にあった柔軟な取り組みを構想する能力となり得るのではないだろうか。

つまりは、【なくり描きの運動感覚的経験】の中で、それぞれの保育者が描画行為が持つ長期的な視点での発達の意味を獲得していることが、組み合わせをより自由に構想するための必要不可欠な要素なのである。

もちろん、こどもは、私たちの構想の中にあるねらいを、はるかに逸脱しながらそれらを経験する。しかし、幼児が持つこの柔軟性に助けられることで、私たちは初めてその関わりにおおよその見当をつけ、実践していくことが可能なのではないだろうか。

(二) 組み合わせの多様性を導く

グレイアム・ミュージックはその著書『子どものこころの発達を支えるもの』

の中で、「赤ん坊は積極的に大人の「絆形成」の反応を誘発し、人間やその顔に関わるようになっていく。つい最近まで、乳児は盲目で生まれてくると信じられていたが、赤ん坊は視覚的に色などのあらゆる種類のものを区別する。また、乳児の最早期の知覚能力の多くは、社会的な存在になるように準備されている。」⁽⁹⁾と論じている。乳児は社会的な存在として生まれてくるのではなく、社会的な存在になることができるよう準備された状態で生まれてくる。準備された状態から社会的存在になっていくには、学習プロセスが不可欠であり、それは、絶え間ない挑戦のプロセスである。だからこそ、こどもは探索行為を続け、自らが動くことによって学び、自らの存在を調整し、他者との関係を探っていくのである。

幼児の描画行為への関わりを、より創造的なありようへと昇華していくには、まずは組み合わせの多様性を確保することが必要不可欠である。【なぐり描きの運動感覚的経験】に接続可能な【その他の運動感覚的経験】を、先の探索行為の中から、つまり、広いパースペクティブの中から、探るのである。そして、環境や状況に応じて、保育者が最適だと感じる組み合わせを、繰り返し選択していく態度こそが、創造的な関わりのあるようなのではないだろうか。

四、保育現場での取り組みから考える

では実際の保育現場ではどのような取り組みがあるのだろうか。筆者の長女が通う保育園では、なぐり描きの前段階の表現活動として、「シール貼り」が採用されている。保育者が作成した牛乳パックのおもちゃに、長女がシールで裝飾を加えるといった取り組みである。

「シール貼り」のねらいは、概ね目と手の協応の発達を促し、思い通りに指を動かすことで達成感と自己肯定感を高められることがあげられる。幼児とシール貼りの関係は深く、さまざまな種類の「シール貼り」が存在している。例えば、色や形のへの理解を促すことや、思考力、弁別力、集中力などを養うことができるよう設計された「ドリル型シール貼り」や、日常的な行為と同期させながらシールを貼っていき、目標に向かった動機付けのための「管理型シール貼り」などがある。ここでは、先述の保育園での取り組みである「表現型シール貼り」に絞って話を進めていきたい。

まずは、保育所保育指針に掲載されている「表現」についてと、そのねらい

を確認したい。「表現」については、次のように記載がある。「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と、続いてそのねらいには「① 身体の諸感覚の経験を豊かにし、様々な感覚を味わう。② 感じたことや考えたことを自分なりに表現しようとする。③ 生活や遊びの様々な体験を通して、イメージや感性が豊かになる。」とある。ここから解釈すれば、「表現型シール貼り」には、身体の諸感覚の経験を豊かにすることで幼児の初期表現行為への導入的な位置付けが期待されていることが理解できる。

さて、では次に、先の「図1」に照らし合わせて考察していきたい。「表現型シール貼り」を【なぐり描きの運動感覚的経験】の導入として位置付ける場合、先行する【その他の運動感覚的経験】がどのようなものとして意識されているのかを読み取る必要がある。例えば、自宅で「表現型シール貼り」に取り組んでいる一歳三ヶ月になる長女を観察してみると、シールを貼るのではなく、置くという行為と渡すという行為を繰り返している姿を観察できた。シールを置いてすぐに長女は筆者の顔を覗き込む。さらには貼ったシールを剥がして筆者に渡した顔を覗き込む。この観察から、幼児は「もの位相が変化することがメッセージになり得ること。また、その変化を通じて他者とコミュニケーションが可能なこと」をこの「表現型シール貼り」で養う可能性があることを確認できる。そして、この運動感覚的経験は蓄積され、なぐり描きを始める際の保育者との密接な関わりに生かされる可能性を持つだろう。

五、接続方法を構想する

ここからは、描画行為の〈始まり〉に厚みをもたらす為の具体的な構想の方法を探ってみたい。必要なものは、先に紹介した「図1」と、保育所保育指針（もしくは園での指針など）、そして、それぞれの考察から得た運動感覚的経験への深い理解である。

例えば本稿で言及してきた幼児の初期描画行為への保育者としての関わりを構想する場合、まずは【なぐり描きの運動感覚的経験】への深い理解がその出発点となる。そして【その他の運動感覚的経験】を広い視野の中で数多くイメージし、下部構造を洗い出す。その下部構造と【なぐり描きの運動感覚的経験】の下部構造を付き合わせることで、関わり方法を構想していく。

また、その発想を保育所保育指針や園の指針と照らし合わせながら評価分析をおこなう。例えば、先の「表現型シール貼り」について保育所保育指針の表現についての記載を参考にしながら筆者が評価分析をしてみた。「感じたことや考えたことを自分なりに表現しようとする」には表現可能な幅(自由度)が低いのでシールの配置や配色などのレイアウトを駆使したとしてもイメージや想像力を養うための探索的な経験をする効果が薄い。表現が周りにいる他者とのコミュニケーションで外側に流れでてしまい(意識が他者にいきすぎて)、「自分なりに表現する」や「イメージや感性が豊かになる」ための思索的行為や時間が薄くなってしまふ。素材の範囲が狭く「身体の諸感覚の経験を豊かにする」ことが難しい。などと分析評価が可能となる。

このようにして、「図1」と保育所保育指針、それから実践的考察から得たそれぞれの保育者が持つ経験の奥行きを行き来することで、幼児への創造的な関わりは構想可能になるのである。

六、まとめに換えて

本稿では、幼児の描画行為の〈始まり〉を意識的に設定することが、保育者としての創造的な関わりを構想するための手がかりとなることを示してきた。しかしながら、〈始まり〉への考察に終始してしまつた点、また、この方法論を下敷きに、授業を展開し、その実践を紹介するところまで研究を進めることができた点などが今後の課題としてあげられる。

また、実践の紹介はもとより、〈終わり〉への考察は本研究の肝でもある。〈終わり〉への視点を本稿の中で語ることができれば、その内容はより充実したものになったであろう。語ることでできなかったこの〈終わり〉へのまなざしは、幼児の描画行為へのこれまでの関わりのあり方を批評的に捉え直し、より創造的な教育へと導いてくれるものだと考えている。これらの課題から見える展望を述べることで、本稿のまとめとしたい。

註

- (1) ローダ・ケログ『児童画の発達過程 なぐり描きからピクチャへ』深田尚彦訳 黎明書房、一九九八年、一八項
- (2) V・ローウェンフェルド『美術による人間形成』竹内清、堀内敏、武井勝

- (3) 雄訳 黎明書房、一九六三年、一三一項
 V・ローウェンフェルド『美術による人間形成』竹内清、堀内敏、武井勝雄訳 黎明書房、一九六三年、一三三項
- (4) V・ローウェンフェルド『美術による人間形成』竹内清、堀内敏、武井勝雄訳 黎明書房、一九六三年、一三八項
- (5) W・グレイインゲル『なぐり描きの発達過程』鬼丸吉弘訳 黎明書房、二〇〇〇年、三九項
- (6) W・グレイインゲル『なぐり描きの発達過程』鬼丸吉弘訳 黎明書房、二〇〇〇年、三二項
- (7) W・グレイインゲル『なぐり描きの発達過程』鬼丸吉弘訳 黎明書房、二〇〇〇年、四九項
- (8) W・グレイインゲル『なぐり描きの発達過程』鬼丸吉弘訳 黎明書房、二〇〇〇年、五〇項
- (9) グレイアム・ミュージック『子どものこころの発達を支えるもの - アタッチメントと神経科学、そして精神分析のあうところ』鶴飼奈津子監 誠信書房、二〇一六、三二項